

小出裕章著「ブラックアウトは何故起きたか」

世界 2011年6月号岩波書店 2011年6月1日刊を読む

原子力工学はどうか

1. 私は京都大学の一人の教員です。京都大学には教員の独創性を尊重する校風があります。ですから、私のような人間も教員として存在していただけるのです。私自身は迫害されたことはありません。しかし、国策として原子力が推進されるなか、文科省傘下の研究機関の中で抵抗しつづけるならば、アカデミズムの世界で生きていくことは難しいのも事実です。
2. 私は1968年に大学に入りました。これはどういう時代だったかといえますと、1966年に日本における商業用の初めての原子力発電所である東海第一号炉が動き始め、つづいて1970年に敦賀と美浜が動き始めるという時期です。まさに日本中が「これからは原子力だ」と沸き立っていた時代だったのです。日本にはかつての帝国大学が7つあります。そのすべての工学部に原子力工学科、あるいは原子核工学科が置かれました。当時、工学部の中でもっとも多くを受験生が集まり、難関とされたのが原子力関係の学科だったのです。これからは原子力の時代だとして、その技術者を育てるためです。私自身も、人類の平和のために原子力が必要だと思い、この世界に足を踏み入れたのです。
3. 私は東北大学工学部を受験しました。当時は学科単位で入学希望を提出したのです。第三希望まで申し込むようになっていましたが、私は原子力だけをやりたかったので、第一希望の原子核工学科だけしか書きませんでした。それほど希望に燃えていた時代でした。
4. しかし、原子力がかつての輝きを失い、さまざまな深刻な問題が見えてくるなかで、原子力を学ぼうとする学生は減りつづけていきます。七帝大からも原子力工学科、原子核工学科は、すべて消えてしまいました。原子力を専攻する学生がいなくなっています。これは非常に危機的だと思います。原子力を推進しようとしている人たちも大きな危機感を覚えています。私も大変に困ったことだと思っています。最近では文部科学省が研究費などで誘導して、原発立地自治体にある大学などで原子力関係の専攻コースを設置している例もありますが、やはりうまくいかないのです。それは当然で、理想と夢の失われた学問を学生たちが目指すはずもありません。
5. しかし、私は、誰かに原子力工学を学びつづけてほしいと思うのです。福島第一原発についても、これから長い年月にわたる課題が残ります。それは誰かがやらなければなりません。また、40年以上も原子力発電を続けてきたために、膨大な量の放射性廃棄物がすでに残されています。さらに、原子力発電所自体が廃炉になっていきます。それらを安全に処理していかなければいけま

せん。そのためには、必ず専門的な知識を持った人が必要なのです。後始末のために学問をやるということに希望はないかも知れません。しかし、どうしても必要なのです。それを理解する学生が来てくれることを私は願っています。

P58 ~ 59

[コメント]

福島原発事故の原因の 1 つは、原子力発電所がここまで現実に存在しているのに、原子力の専門家の絶対数を増やす取り組みを国家戦略として行っていない点にあると私は考える。今からでも遅くない。全国のすべての理系大学院に原子力研究科を設置し、現在の問題の解決にあたらせるべきだ。

- 2011 年 5 月 27 日 林 明夫記 -